

路上生活経験のある発達障害者の自立に向けた支援の実践

大鐘 要・大鐘 啓伸

Practice for the Independence Support of People with Developmental Disabilities who had Street Life Experience

Kaname OGANE and Hironobu OGANE

I. 問題

1. 路上生活経験と発達障害

生活保護法に基づく施設である更生施設は、身体上または精神上の理由で健康回復や生活支援を必要としている生活保護受給者が利用している（以下「施設利用者」と表記）。施設では、施設利用者に対して、地域社会復帰に向けた健康回復への支援や作業訓練、職業訓練など生活全般について指導や援助を行っている。

施設利用者の傾向としては、高齢化していることや発達障害を抱えているケースが増えている（田村・古澤・片山・森山，2009）。そのようなことに加えて、施設利用者の多くが路上生活を経験し、これまでのライフイベントによって悲哀や喪失感を抱えている（野上，2002）。路上生活を脱したいと考えながらも、自分の心に抱えている気持ちを話せる場もなく変わらない現実の中でつらいと思いながら生活している（葛生・宮園，2006）。そのような現状において、施設利用者が路上生活に戻らないためにも、生活全般の指導や援助に加えて、ライフイベントによって抱えた悲哀や喪失感に対処するための心理的援助が求められているところである。

2. 心理的援助の現状

施設利用者の心理的援助については、包括的施設支援としてバックアップセンター事業の計画が実施されている（特別区人事・厚生事務組合，2007）。この計画での心理的援助としては、障害に関するアセスメントが60%程度、生活能力のアセスメントが25%程度であると報告されている（田村・古澤・片山・森山，2009）。

また、施設利用者の就労などの具体的な自立に関する相談を個別に行い、就労意欲の喚起に向けた援助も行われている。そのような援助が、施設利用者にとって安定した就労や自立した生活に移行するという目標になっていくものである（特別区人事・厚生事務組合，2007）。

奥津（2007）は、職業相談の実際について、カウンセリングやコンサルテーションなどの基本的な理念および基礎的技法をもって取り組むことで就職目標を明確化でき、そのことに併せて社会の枠組みを踏まえた現実的な対応によって、自立した判断の下に合理的な求職への態度や行動を獲得していくことが重要としている。さらに、臨床発達心理学的なアプローチが充実されていくことについても課題となっている（坂本，2010）。

これらのことから、施設利用者への自立支援に向けた取り組みは、臨床心理学や発達心理学に基づく心理的援助のアプローチが期待されているところである。しかし、そのようなアプロ

チの位置づけや具体的な役割と機能については明確化されていないところもあり、これからの検討課題になっている (大鐘・大鐘, 2015, 大鐘, 2016)。

II. 目的

筆者は更生施設A荘において自立支援相談員として従事し、個々人に応じた心理的援助を行っている。その援助は、これまでのカウンセリングやコンサルテーションなどの活用に加えて、個々人の生涯発達の過程における様々な臨床発達心理に関連する専門的技術および知識に基づくものである (二宮・宮沢・大野木, 2006)。しかし、筆者が実践している施設利用者への心理的援助に関しても、その役割などが明確になっていない状況にある。従って、その援助の内容が施設利用者への自立支援に対してどのような効果を及ぼしているかを検証する必要がある。

本論では、発達障害を抱えた路上生活経験者への自立に向けた心理的援助が自立に向けてどのような影響をもたらしているかを分析するものである。なお、この論文を作成するにあたっては、事例の対象者BさんからA荘に、個人情報等の取り扱いについてA荘に委任する旨の承諾書が提出され、A荘所属長からは、匿名性を保持するため事例の内容が損なわれない範囲で修正することを条件とし、許可を得た。

III. 方法

1. 発達支援の対象者の概要 (年齢、性別、所属、家族構成、支援・教育歴等)

Bさん。57歳。男性。単身。病歴なし。理系大学卒業、理系大学大学院修士。30年間、印刷や書籍関係の会社でパート職員として就労。45歳ころまではアパートに住んでいたが、その後は住所不定となり、平成X年6月に失職し、路上生活に至った。生活保護を受給して、A荘に入所。ケースワーカーのケース記録では、高機能自閉症と診断されたことや自立生活可能との記載がされていた。Bさんの就労意欲は低く、なかなか自立に向けた生活が進められないことから、筆者に就労支援と併せて心理相談が依頼された。

2. 発達支援等を実施した機関・施設・場所及び報告者の役割、立場、関わり方

(1) 実施機関・場所 更生施設A荘・更生施設A荘相談室及びハローワーク等

(2) 役割・立場・関わり方 役割：更生施設利用者 (路上生活経験者) の就労。立場：自立支援相談員。関わり方：心理面接・生涯発達のアセスメント、自立への意欲喚起および就労活動を促進するための心理的援助、就労先への同行等のアウトリーチ

3. 実施期間

200X年11月から200X+1年3月まで。

4. アセスメント

(1) 行動観察：A荘での生活について、Bさんの行動観察を行った。ひとへの反応や関わり方の乏しさ、社会的関係形成の困難さが窺われた。目と目が合うことはあまり感じられなかった。他の施設利用者との社会的関係がないように思われた。A荘のお楽しみ会では、楽しい気持ちを他人と共有することや気持ちでの交流の様子が見られなかった。ゲームの場面で、他の施設利用者の中で一緒に行動をするが、協力して何かをする様子はないようであっ

た。筆者はBさんに話しかけたが、共感を得ることが難しい感じがした。生活相談員が話しかけたが、会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、問合いが取れなかったりする感じであった。Bさんの興味や関心が狭く、社会生活や施設での生活に適応できていないと思われた。

全体の評価として、会話からは、話し言葉の遅れもないが、身振りなどにより補おうとすることもない。会話の最中に会話に興味を示さない態度を表し、他人と会話を開始し継続する能力に困難性があるのかと疑う。常同的で反復的な言葉の使用または独特な言語はない。知的発達遅れは認められない。

- (2) 環境・生態学的調査：環境・生態学的な調査のためにA荘内で、生活指導員と同行のうえ、Bさんに声をかけた。Bさんと初めて会った際に、「こんにちは」とあいさつした。Bさんはこちらに向かっては来るが、声をかけたのに視線が合わない。そして、近寄ってきたかと思えば、いきなり自分の関心事を語り始めた。筆者は戸惑った。このようなことがケースワーカーや生活指導員との関わりの中でもあるとのことであった。生活指導員からは、Bさんからいきなり何かを要求されたり、質問を投げかけられたり、自分の関心事を独特の一方通行で延々と述べるだけだったりすることがあるとのことであった。A荘内でのあまり見知らぬひとにでもいきなり意図の分からない質問をすることがあるとのことであった。筆者は、話し相手が自分の話していることに興味を持っているか、理解しているかどうかを確かめるために、Bさんの言葉や表情、身振りなどの反応を観察したところ、会話の内容や話し振りを相手によって使い分けることが不自然であるように思われた。たとえば視線においては、視線が合わなかったり、逆にじーっと見ていたり、表情が無かったり、にらんでいるように見えたり、大げさに思えるようなものだったりする場面があった。

5. 総合所見

- (1) 対象者の状況：ひとは見て、聞いて、感じて、意味づけたものを情報として積み重ねて記憶から探し出し、映像やことばを引き出す脳の機能を使ってイメージを創り出すという情報処理能力が認知機能である。Bさんはこの機能が上手くいっていないように思われた。そのため、Bさんが高機能自閉症に起因した発達障害や心理的問題を抱えていることが考えられた。そのことによって、Bさんはひととの関わりがスムーズにいかない状態を生じさせていると考えられた。また、成長の過程で形作られた性格・人格によっても行動はずいぶん変わっていることが推測された。従って、Bさんの行動が発達障害の由来でも、性格・人格の由来でも、同様の行動がみられることがあることを前提としておかないといふ加減な障害の当てはめをしてしまうことになりかねない。同時にそのことは、障害やそのひとが抱えているものを見えにくくすることになる。
- (2) 心理的等の状況：Bさんの認知の仕方が、障害を有していることで、他のひとと同じものを同じように見たり聞いたりしていないことが考えられる。さらに、物事に対する解釈や感じ方も異なるであろう。一見同じようにみえる経験をして、経験したことは違う可能性があることが想像される。その異なり方を認識せずに、自分を当然のように基準にしてしまうと、ケースワーカーなどが提供する援助などと本人が必要とする援助に食い違いが生じてくる。従って、Bさんが高機能自閉症であることを認識し、その症候群のひとには内的・外的世界がどのように見えているかを理解することが必要であった。また、乳幼児からの発達の過程で、周囲がそのことを理解していない場合は、適切な時期に適切な環

境や援助が与えられず、思春期やそれ以降になってからようやく気付かれたときには、心理的な傷付きや乏しい自己肯定感、他者への不信を抱えているということになりやすいことを念頭に置く必要があると思われる。さらには、ずっと気付かれずに成人した場合は、独り生きにくさを抱えていると考えておく必要があるだろう。

6. 支援仮説、長期・短期支援目標の設定、支援計画の策定

Bさんの支援については、まず、発達障害が起因していると思われるBさんの行動上の課題、認知の課題、感情や情緒の課題、動機づけの課題の機能分析(図1)を行う必要がある(Beck, 1976、坂野, 1995)。その上でBさんの生涯発達の過程で抱えている心理的課題を踏まえ、具体的な自立に対する認知と行動を獲得していくように支援するという仮説を設定した(図2)。

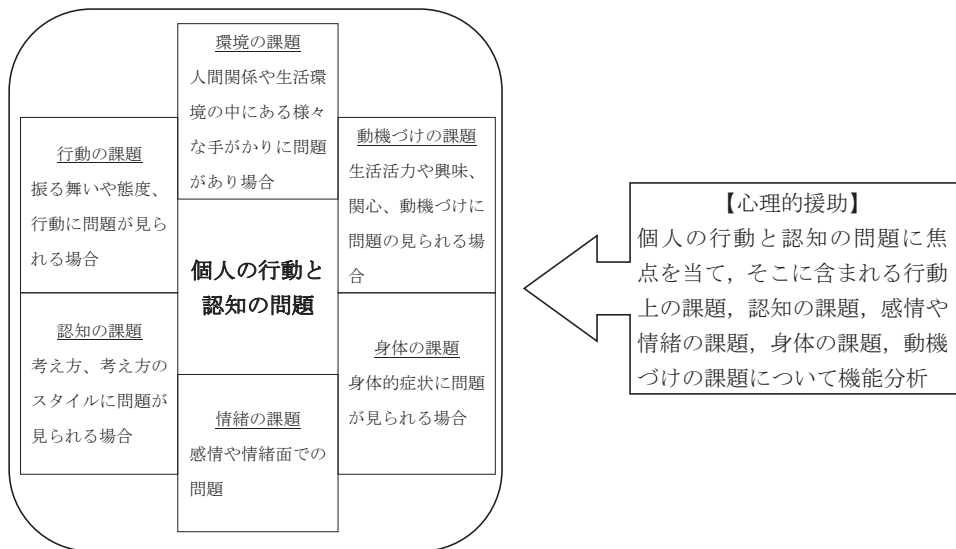


図1 認知行動療法に基づく問題の機能分析 (Beck, 1976・坂野, 1995を参考)

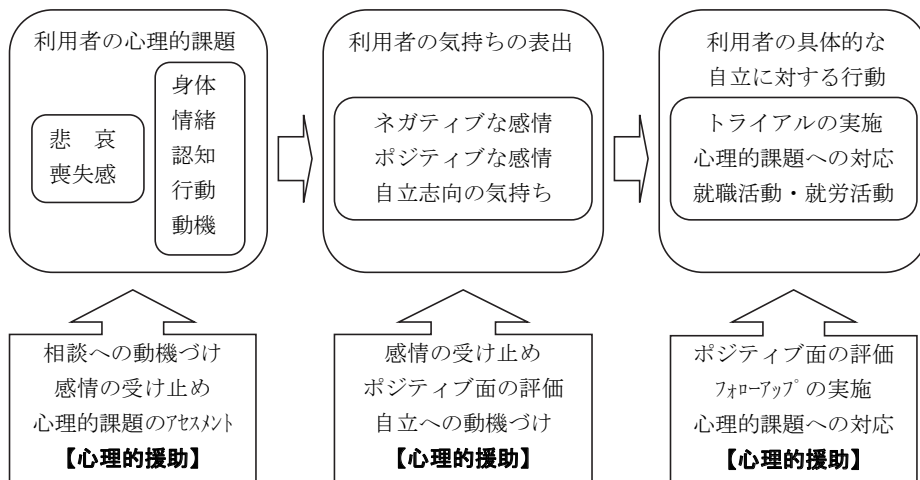


図2 心理的援助を活用した自立支援の対応

短期支援としては、発達の過程で抱えてきた心理的な傷つき、特徴的な自己表現や他者との関係における生きにくさなどによって生じている感情について、表出できるように関わるとともにその感情の受け止めを行うことである。

長期支援としては、具体的な行動への評価を本人にフィードバックしながら、自立への動機づけを強化して、継続的な自立志向の気持ちを表出できるようにサポートするとともに、現実的な自立のための行動につなげていくことである。

支援計画としては、まず、Bさんの行動や認知に対する機能分析を行うとともに、これまでの発達の過程の中で生じた感情などの表出を受け止めることを目標とした。次に、自立志向の気持ちの表出に向けて、自立への動機づけを目標とした。具体的には、自立に向けた行動を促すことであった。そしてその次の目標として、自立に向けた行動についてポジティブな評価を繰り返して、自己評価を高めていくこととした。

V. 事例

1. 対象者の時系列的変化

200X年11月：(1回目)生活指導員からビル清掃の仕事をするように言われたので、その仕事を申し込みたいとのことであった。生活指導員との話し合いの経緯を質問しても、「はー」とか「ふー」とかの返事で気力が感じられなかった。また、具体的なビル清掃の内容について話をしても、全く興味をしめず気配が感じられなかった。路上生活のことや自立することについて思っていることを話すように促すが、反応はなかった。(2回目)1回目と同様の面接であった。就労への具体的な行動を促すために、軽作業の求人票を渡したところ、Bさんは黙って受け取った。この時期はBさんに相談することや自立への動機付けを行うことが必要であった。

200X年12月：(3回目)面接場面だけでは、Bさんの自立への動機づけが難しいと思い、具体的な行動を促すことが必要と考え、ハローワークに同行した。ハローワークでは、Bさんはパソコンで何件か求人票を検索し、ハローワークの職員に相談した。しかし、Bさんの職員への話し方は抑揚がなく、就労意欲が感じられないものであった。職員からは、『あなたのような高学歴のかたに、ふさわしい仕事はハローワークにありません』と言われたが、Bさんは表情も無く、ぼーとした感じであった。帰り道で、『これは誰にも言っていない話だけど、学生のときに、ギャンブルで大当たりをした。こんなに簡単に金が手に入るなら苦労すること無い。ギャンブルで食べていこうと思って、T市にでてきた。パートをしながら、ギャンブル生活をしてきた』、『保護にかかってから、故郷の兄とT市であった。ずっと音信不通にしてきたが、保護をかかるときに連絡された。親はなくなったという。少しあった借金を肩代わりで返済してもらったかわりに、縁をきった』などの話をしてくれた。Bさんのネガティブな感情を受け止めながら聞き続けた。(4回目)Bさんから出版関係や倉庫内軽作業をしたいとの希望が出された。だが、求人票を見せると、就労条件のあそこが不満、ここが不満と文句が先ず出て、結局、応募先が決まらなかった。Bさんのつかみどころのない気持ちを受け止めながら見守った。

(5回目)これまでの検索していた求人内容は本人の学歴を考えずに行っていた。上手く進められなかったのは、Bさんの自尊感情を取り扱っていなかったと考えた。それが、Bさんの就労活動への意欲が高まらない原因と思われる。そこで、理系の技術や知識を必要とする仕事を提示した。しかし、Bさんはあまり関心がない様子であった。(6回目)Bさんから、自分一人でハローワークに行き、化学研究所の仕事を応募したが、面接で不採用となったことが語られた。筆者は、Bさんの行動をねぎらい、引き続き就労に向けて気持ちを持つように励ました。

200X+1年1月：(7回目) 指導員から、入所して三ヶ月になるのにほとんど進展していないので退所も考えねばならないと強く叱責されたとのことであった。Bさんは『このままではいけない』と語った。学歴の高い人がホームレスをやっていたことで採用に至らないことを話し合った。Bさんは、とにかく就労しなくてはという気持ちにこだわり、軽作業の仕事に応募することとなった。(8回目) 応募した面接の結果は不採用であった。面接の内容を話し合ったところ、Bさんとしては、高学歴でホームレスをしていたことを相手方にいぶかれたので不採用になったと気落ちした様子であった。筆者は、Bさん自身で自立に向けて行動したことをねぎらい、その気持ちを持ち続けるように促した。(9回目) Bさんには就労についての認知の課題があると思われたので、就労についてのポジティブな面を体験できるようにとトライアル就労の仕事提案した。仕事の内容について説明したところ、Bさんは意欲的な態度を示した。面接場面での行動や態度、話の受け応えについてロールプレイを通して、対人関係のスキルの習得に取り組んだ。(10回目) トライアル就労先の社長の面接に同行した。面接について、前回のロールプレイを繰り返しおさらいして面接に臨んだ。面接の結果、すぐに採用が決定した。Bさんからはロールプレイのとおり面接の応対ができたとのことであった。200X+1年2月：(11回目) 面接の前にトライアル就労先からA荘に苦情があり、その内容が生活相談員から筆者に連絡があった。苦情の内容は、「会社の人にも全く挨拶等ができない。何事も他の誰かが用意しないと何もたないで作業に出ようとする。地図を用意して、消火栓の位置を確かめようとしても、他の誰か任せで全くやらない。」ということであった。Bさんに就労先での様子を聞くが、一生懸命がんばっていますとのことを抑揚もなく答えるだけであった。苦情の内容をもとに仕事での手順を整理して説明したが、Bさんはあまり気にしていない態度で視線も合うことがなかった。がんばるように励ますと、最後までやると言うが淡々としていた。(12回目) トライアル就労の仕事を終了した。Bさんは最後までやりとげたと話し、筆者はそのことをねぎらった。「マイペースでしたが、やり遂げましたね」とポジティブ面を評価した。Bさんは恥ずかしそうではあったがうれしそうなお表情になった。その後、自分一人でハローワークに行った。200X+1年3月：(13回目) 前回、ハローワークに行き応募した小さな印刷所に採用になった。Bさんは、「前にやっていたのと同じような仕事で安心してできる」と言った。「パートだけれども、日曜以外のフルタイムの仕事で収入は16万程度、これで自立できる」と話した。自立のめどを自分自身でたてたことをねぎらい、これからもロールプレイでやったことや仕事の手順を確認することを忘れずに行うことを伝えた。

VI. 考察

1. 対象者の時系列的変化のメカニズムに関する検討

(1) 対象者の時系列的変化のメカニズム

相談当初、ネガティブな感情を表出することが多かったBさんに対して、筆者はその感情を受け止めていった。そのことによって、Bさんは自らの心理的課題に対する気づきが促され、自立志向の気持ちが表出されるようになっていった。そして、Bさんはトライアル就労に取り組んだり、具体的な就職活動や就労活動という自立に対する行動をとっていった。また、筆者がBさんの心理的課題に対して機能分析を行うことは、Bさんの心理的課題を明確にするとともに、筆者のその後の対応に有効であったと考えられた。それは、Bさんの悲哀と喪失感に対する心理的ケアについての適切な対応を行うことができたことであろう。さらには、Bさんの自立志向の気持ちの表出に対して、筆者はBさんのポジティブ面を評価したり、自立への動機

づけをしたというように、Bさんが具体的な就職活動や就労活動の行動をしていくために適切に対応できたものではなからうか。

認知の課題への対応は、Bさんのネガティブな気持ちの表出を筆者がその感情を受け止めるという対応を行うことに加えて、相談への動機づけ、自立への動機づけ、ポジティブ面の評価によって適切な認知の獲得に至っていったと考えられた。また、適切な行動についての習得についても取り組んだことは、適切な認知の獲得への過程を発達的に促進していったものと考えられた。Bさん自ら適切な行動を獲得していくことに繋がっていったものであろう。Bさんの行動と筆者の対応の主な内容については表1のとおりである。

表1 Bさんの行動等と心理的援助についての主な項目

	主な項目	抽出した事項
Bさんの 行動等	ネガティブな気持ちの表出	これまでの生活歴についての否定的な話やこれからの就労についての不安などに関する事項
	自立志向の気持ちの表出	就労に向けての意思表示などの事項
	単純な応答	「はい」、「いいえ」などの単純な応答の事項
	ポジティブな気持ちの表出	自分に対する肯定的な話などの事項
	問題行動の修正	自分の問題行動に対する自発的な修正に関する事項
心理的援助	自立への動機付け	就労についての説明やトライアルへの参加提案およびフォローアップに関する事項
	感情の受け止め	否定的な感情を伴う話などに関して、受け止めて聞いている事項
	相談への動機付け	相談や自立への意欲が低い場合などに、なんでもよいから話をするように促している事項
	問題行動の暴露	振る舞いや態度、行動の問題について、明確に相手に伝えるなどの事項
	ポジティブ面の評価	肯定的な部分について、評価をしている事項

路上生活を経験しているBさんは、疾病や障害を抱えながら喪失体験をしていたり、悲哀を心の内に隠し続けていることで、現実への適応が危機的になるというライフサイクル上の問題が生じているようであった(山際・辻河, 2009)。そのような中でも特に対人関係の困難さは(山際・辻河, 2009)、路上生活の経験が適切な自己開示をできない状態にしていくのではなからうかと考えられた。従って、そのような心理状態への対応については、ネガティブな気持ちを受け止め、その後、ポジティブ面を取り上げることで、自立への意欲が高めていくことが重要であると思われた。

(2) 関わる人々・環境の時系列的変化のメカニズム

生活指導員によると、周囲の施設利用者がBさんに話しかける場合でも、その場にあった返

事をするのはまれで、たいていは表情も無く聞いているとのことであった。頼み事をする、嫌がることもなく引き受けるが、必ずその頼みごとをするとは限らないので、トラブルになることもあるとのことであった。生活相談員はその度にBさんとBさんに関係していたひとの間に入って対応しなくてはならなかった。相談当初、筆者は生活指導員に、Bさんはこれまでの生活歴において家庭などで何か問題があることを前提にした対応が必要であることを伝えた。また、相談中期では、Bさんがトライアル就労により社会的なスキルの習得を目指すことが必要と提案すると、生活相談員は了解してくれた。生活相談員はBさんに発達の遅れを感じる、学歴からそれはないと考えることが相当と思っていたからであった。相談後期には、生活指導員はBさんの自分の身の上話を聞くことから、Bさんの生涯発達の社会に適応しようとする中で抱えてきた悲哀や喪失感に共感して、がんばっているところを励ますようになった。

2. 目標設定・支援方法の妥当性、支援の効果に関する検討

Bさんのネガティブな感情を受け止めながら、仕事に対するネガティブな認知の対応については、トライアル就労による仕事を通してポジティブになるように促したことで、適切な認知と行動を獲得し、就労に繋がった。そのために筆者は、高機能自閉症を抱えたBさんの特徴である社会性がないこと、ひととの接触がうまくできないこと、ひとつの事にこだわってやることなど (Asperger, 1944, Wing, 1996, 内山 吉田 水野, 2002) についてアセスメントした。そのアセスメントによって得られた所見をもとに、Bさんの心理的課題に対応した関わりを行った。Bさんは自分自身のライフイベントやそれに伴う感情を筆者に話し始めたことをきっかけに、自立へ行動の促進や適切な認知の獲得に向かう態度が示されるようになった。また、筆者がBさんの情緒、認知などの課題への機能分析を行うとともに、ライフイベントから生じた悲哀、喪失感を受け止め、さらに相談への動機づけを行ったことで、Bさんはネガティブやポジティブな感情を表出できるようになった。そして、筆者はそれらの感情を受け止めるとともにポジティブ面を評価して自立への動機づけを行った。そのような関わり方によってBさんはトライアル就労の実施や社会的スキルへの習得への取り組みなど具体的な自立に向けて行動していった。その後、筆者は、継続的にポジティブ面の評価、フローアップの実施、心理的課題への対応を行った。

心理的援助に関する効果としては、Bさんの心理的課題に対して臨床発達心理学的なアプローチによって、Bさんは生涯発達の成長し、社会的な適応を促進していくことで、自立への過程をたどっていくものと思われた。

3. 新たな理解・評価と今後の課題

発達障害者への心理的援助の取り組みは、臨床心理学や発達心理学を専門的に習得していることが必要である。従って、心理的援助を福祉現場において一般化していくためには、今後も様々なケースに対応していく中で、その有効性を引き続き検証していくことが求められる。その上で、心理的援助の方法を誰もが活用できるようにマニュアル化していくことに繋げていくことが大切となる。

そのようなことに向けては、本事例においての課題として次のことが挙げられるであろう。それは、Bさんの自立が上手くいかないことが本人の行動や認知の課題によっていることを、周囲で援助している人達は気づかなかったことである。従って、高機能自閉症という障害がどうということなのかを、筆者が生活相談員などに理解できるように伝えることが必要であった。

そのことで、全体の支援の質をより適切なものにしていく取り組みになっていく可能性があったと思われる。つまり、発達障害者が自立した生活を継続していくためには、高機能自閉症などの臨床発達心理学的アプローチを支援者が理解することは重要な課題である。

Ⅶ. 引用文献

- Asperger, H. (1944) Die 'autistische psychopathen'in kindesaetr. Archiv fur psychiatrie nd nevenkrankhaiten.117, 76-136. (小児期の自閉的精神病質、高木隆郎・M. ラター・E. ショプラー (編)、自閉症と発達障害研究の進歩、2004、30-68.)
- Beck, A. T. (1976) Cognitive therapy and emotional disorders. International Universities Press.
- 葛生聡・宮園麻里 (2006) ホームレスの支援. 臨床心理学 6 (5) ; 696-698.
- 二宮克美・宮沢秀次・大野木裕明 (編) (2006) ガイドライン生涯発達心理学. ナカニシヤ出版.
- 野上亜希子 (2002) 路上生活者における喪失体験と悲哀の心理. 心理臨床学研究20 (2) ; 133-144.
- 奥津眞里 (2007) 失業者の求職意識と就業実現度－技能習得と職業相談の再就職促進効果－. 産業カウンセリング研究 9 (1) ; 1-10.
- 大鐘要 (2016) 更生施設における自立支援の現状. 東海相談学会会報第49号 ; 4.
- 大鐘要・大鐘啓伸 (2015) 路上生活の発達障害者に対する自立支援－心理的援助による就労支援から－. 日本心理臨床学会第34回大会発表論文集 ; 263.
- 坂本佳代子 (2010) 路上生活者支援における臨床発達心理士の役割－関わり始めて間もない時期の問題意識を終身に. 臨床発達心理実践研究 5 ; 27-35.
- 坂野雄二 (1995) 認知行動療法. 日本評論社.
- 田村勝・古澤明・片山貴裕・森山治 (2009) 更生施設における「心理相談」を活用した利用者支援の取り組み. 第32回社会福祉事業団職員実務研究論文集 ; 20-28.
- 特別区人事・厚生事務組合 (2007) バックアップセンター事業案内.
- 内山登紀夫・吉田友子・水野薫 (編) (2002) 高機能自閉症・アスペルガー症候群入門－正しい理解と対応のために. 中央法規出版.
- Wing, L. (1996) The autistic spectrum. A guide for parents and professionals. (久保紘章、佐々木正美、清水康夫 (監訳)、自閉症スペクトル、親と専門家のためのガイドブック、東京書籍、1998).
- 山際志穂・辻河昌登 (2009) 路上生活経験者の内的世界に関する心理臨床学的研究. 発達心理臨床研究15 ; 133-143.

Abstract

People with developmental disabilities repeat the experience that they cannot go to work in the situation of street life. Therefore, they do not return to street life even if they have developmental disabilities, when they are provided with instructions and support of their overall life. In addition to this, psychological support to deal with the grief and the loss to occur from the life events is important. In this study, I examined the example in which the writer who was a counseling for the rehabilitation support of a person with developmental disabilities experienced street life. I took the problem of his feelings and emotion such as loss experience or grief. Then, I sympathized and clarified them. Next, I set the improvement contents to his behavioral problems. By such support, he could go to work.

